

19世紀ドイツの偉人変人

—その2 ナポレオン戦争期—

丸子 基夫

I Bestürzung (杳然自失) と Beharren (忍耐)

〈1〉 18世紀の後半に生きたドイツの知識人のほとんどは、宗派的憎悪心の減衰、つまり容寛の徳の浸透、啓蒙君主による人道的善政の拡大、通信路の安全と改良による学問・芸術・思想の国際的交流と発展のすばらしさ、国際間の紛争を主として外交によって処理する傾向の増大、などの現象を目のあたりにして、自分たちは遂に、残虐と暗黒のあらゆる過去と袂別して進歩とそして理性の時代に入ったとの確信をもつことができた。バルト海岸の大学町に一生留まりながら全ヨーロッパの哲学・科学・政治の動向を把握し批判しえたカント。1760年代の半ばにヨーゼフ・ハイドンは自分の音楽が、7年戦争が終るやいなや、遠いパリやロンドンでも好んで演奏されたのを知った。ペテルブルグでは強権の専政君主たるエカテリーナ女帝が別荘 Eremitage をフランス人であるドラ・モットに建てさせ、ここに並べる家具、彫像、絵画をその道の権威であるドニ・デイドロ（あのフランス革新派の頭目）に依頼し、彼はひどい苦勞の船旅をしてロシヤまでやってきて任を果し、おまけに女帝のために「ロシア大学設立案」を書いてやった（1774年）。フリードリヒ大王が1750年にヴォルテールをベルリンに招じた時、その秘書となったのは青年文学者レッシングであった。（もっとも二人は間もなく喧嘩別れをするのだが。）ドイツ知識人はニューイングランドの13州が理不尽な母国に反抗して立上った独立戦争に例外なく深い感銘をうけ、とりわけシラーは臣下を英国に傭兵として売った某ドイツ君主を弾劾する意味をこめて、悲劇「たくらみと恋」（1784年）を発表し、封建身分制の冷酷さと共和制への熱望を活写することに成功した。

その5年後、パリの民衆によるバスチユ監獄の破壊と、それにすぐ続く国民議会による「人権宣言」の議決は彼らをこのうえなく喜ばせた。フランスに近いチュービンゲン大学の神学寮に住んで教会教義学やギリシャ古典学に没頭していた若いヘルダーリンやヘーゲルにとって、もちろん、Liberté と Égalité の政治的勝利という大事件は一生涯を貫いて決定的な思想体験であり続けたし、31才の共和主義者・理神論者ファイヒテは

不敵にも「ヨーロッパ諸君主に対する思想の自由の返還要求」なる論文を革命擁護論とともに発表して各国の宮廷をいたく刺激する一方、ヘーゲルやシエリングらを感じさせ^(注1)て止まなかった。

しかしパリからの報道は、急速にLibertéがÉgalitéに押しつけられ、Fraternitéは対外戦争の強行が進むにつれて「博愛」から「同胞愛」へ、更には尊大な「愛国心」に変質してゆく様を伝え、それが遂には1792年9月の王党派大量虐殺にはじまる流血醜鼻の権力闘争にきわまるの見て彼らは冷水三斗の思いをくり返す。フランス国内での経済混乱、農民一揆の頻発とそれに起因する食料欠乏、対外戦争をめぐる党派間の陰謀や暗闘を知らずに、革命の大義のためパリへはせ参じた著名な博物学者で作家のG. フォルスターは、ロベスピエール派の恐怖政治の混乱の中で幻滅と苦悶の果にかの地で窮死した(1794年)。

それに続いて、共和体制と熱狂的ナショナリストを徴兵した大軍団を率いるナポレオンの嵐の如き戦略用兵の前に、英国と北欧を除く全ヨーロッパはひたすら平伏するか逃避するしか術がなかったが、ドイツの知識人もこの怪物独裁者に対しては呆然自失し沈黙するばかりだ。やがて1803年にヘルダーが、1804年にはカントが没し、「テル」を書き終えたばかりの病弱なシラーが死んだ1805年にはオーストリア・ロシアの連合軍がボヘミアで彼に完膚なきまでに撃破されてしまい、ウィーンは占領されて850年の光輝ある伝統をもつDas Heilige Römische Kaiserreich Deutscher Nation「ドイツ民族の神聖ローマ帝国」は、ライン地方と南独の諸国がフランス皇帝の保護領とされるとともに一夜にして消滅したのである。当時駐仏大使としてパリで難局に当りつつナポレオンの実力を注視していたメッターニヒ侯爵は、敗残の祖国を暫く休ませて国力回復させる為に、他の国々を反フランスにけしかける秘策を練っていたといわれる。一方ウィーンではこの頃フランス軍による占領にもかかわらず、耳疾による絶望から立直った35才のベートーベンが、「ギリシヤの少女の如き」幸福感にあふれた第4交響曲と、優美で平和なDas Klavierkonzert Nr. 4完成している。オーストリア軍の敗北はウィーンの人々の生活を根底から震憾させたわけではなく、講和が結ばれると占領は解かれた。

さて欧州大陸の強国のうち、ほとんど無傷で残っていたプロイセン王国の去就が今や注目される。既にライン左岸の自国領はナポレオンに奪われ、ドイツ帝国は彼の命令によって瓦解し、彼は王国に対しますます高飛車に出てきた。故フリードリヒ大王以来のあの精鋭国軍は何をしているのか。コルシカ島出の成上り皇帝ボナパルトに、高貴なる選帝王家がこれ以上面子をつぶされて黙ってられるのか。かくて大慌ての動員が整わないうちにプロイセンはイエーナで戦備十分の敵と交戦する羽目になり、一日で完敗、10日後には首都まで占領されてしまい、王家は東の国境の町ケーニヒスベルク(カントの住んだ町)まで落ちのびなければならぬ(1806年10月)。更に翌年ロシアと連合して

の最後の決戦にも敗退してしまい、ほとんど無条件で和を乞わねばならなかった。しかも Tilsit での和平交渉にプロイセンは出席させられず、ナポレオンとロシア皇帝だけが相対したのである。強硬なフランス側は始めプロイセンという国そのものを小分割して消そうとしたが、アレクサンドル一世がロシア防衛の観点から反対して、その存続だけは認めさせることができた。しかし代りにのまされた媾和条件のなんと苛酷だったことか！ (1) 賠償金1億3千万フラン。この全額を支払うまで仏軍が占領を続ける。(2) 住民約500万を含む領土、とりわけエルベ河から西ぜんぶと旧ポーランド領を割譲する。王国は戦前の $\frac{1}{2}$ 以下になった。(3) 保有する兵力は42,000人とする。(4) 秘密条項として、対イギリスの大陸封鎖・通商断絶政策を受入れること。

中欧の雄・北ドイツの覇者と目されていたプロイセンは今や三流国に転落し、新たに組み合わされたライン連邦とウエストファリア王国の王としてナポレオンは二人の弟を即位させ、ドイツ諸邦はそれを承認させられたのである。当時イエーナのすぐ傍の Weimar に住んでいた58才のゲーテは、歴史的な大事件などどこ吹く風と、「ファオスト、第1部」を完成してから、年来の関心事たる地質鉱物学の研究にとりかかり、翌年には「マイスターの遍歴時代」に手をそめたり若い娘に熱中したりの非愛国者ぶりだった。また彼の最大の関心事は、「生涯の仕事である色彩論」にあったのだ。1808年には巡察にきたナポレオンに会って、「ウエルテル」をほめられたりしている。彼の主君たるザクセンワイマル公がプロイセンと組んで敗北して、多くの中小国と共にライン連邦に組入れられる屈辱を受けているのに。またイエーナ大学員外教授で決戦の前日「精神現象学」の執筆に没頭していた世界史の哲学者ヘーゲル(36才)は、「この一地点で馬上に坐しながら、しかも全世界を覆って支配している皇帝すなわち世界精神 Weltgeist^(注2)」を眼のあたり見た強烈な感激の印象を親友に書き送っている。

〈2〉 敗戦によるプロイセン国内の虚脱感・屈辱感は当然ながら深刻だった。宮廷を開戦へと鼓舞し、純朴な人柄と美貌によって国民に人気の高かったルイーゼ皇后は媾和の2年後にやっとベルリンへ戻ったが、彼女が支持したシュタイン＝ハルデンベルクらの画期的な内政改革の結実をたしかめる暇もなく急死し(34才)、ドイツ人民すべての涙をしばった(1810年)。張子の虎だったことを曝露された国軍に対する批判誹謗が最もきびしく、大量の士官が処分された上、砲術中佐シャルンホルストラが上申した「国民皆兵に基づく常備軍案」が軍制改革の叩き台として登場したが、ユンカー貴族の勢力下にある軍部や宮廷では改革派が die Jacobiner (ジャコバン派) と綽名されうとまれ続けた。識見と知性的大臣フォン・シュタインやフォン・ハルデンベルクらも、国王に嫌われたりナポレオンに警戒されたりして、長く職に止まれぬ有様だった。

それでもハルデンベルクが1810年に再び首相に任ぜられるや、自ら外務・内務・大蔵

の各省を指導し、有能な近代派官僚を抜擢してシュタインの改革を続けて遂行することができた。農地改革、土地税徴収の公平化措置（これは封建貴族の反対で骨抜き）、職業の自由、参謀部の創立とその強化、新しい士官学校の設立など。駐バチカン公使を長く務めた根っからの人文学者で国際人たるウイヘルム・フォン・フンボルトが祖国プロイセンの名誉失墜と意気消沈を坐視するにしのびず、1809年に文教長官に任ぜられるや精力的に学制改革に献身したことはよく知られている。彼は現場の経験も豊かな秀れた顧問に補佐されて、国民学校にペスタロッチーの貧民校・田舎学校の実践要綱をとり入れ、師範学校を拡充し、研究と教育を有機的に統合する画期的なベルリン大学を創立するなど、道義と精神において国民を鍛え上げる方向で大いに貢献したのである。

このさい彼の弟アレクサンダー（自然科学者・地理学者・探険家）の独特な尽力についても一言しておかねばなるまい。パリに永住してフランス科学界に名を為し、ほとんどの著作をフランス語で書いているこのプロイセン人は丁度この頃ベルリンに帰省していたが、1807年1月、「とりわけ打ちひしがれた人々のために」ベルリン科学院において、自ら探険し観察し記録してきた南米オリノコ河流域における動植物相・気象について実にすばらしい講演を行った。翌年これが中心となって、『*Ansichten der Natur*』と題する書が出版され、全ドイツの知識人に深い感銘を与え、以後も長くドイツ国民の知的財産となった。探険紀行文学の古典と目されている「自然の観察」がこれである。

『*Über die Steppen und Wüsten* (曠野と砂漠について)』からの一節を訳出しよう。

「決して曇ったことのない太陽の垂直光のもとで炭化した地表の草が埃となって飛びちると、固くなった地面はまるで強い地震にゆさぶられたかのようにパッキリ割れる。そこへいろんな空気対流が回転運動の中で勢力を平均化しながらふれると、平原は異様な光景を呈する。先端を地上にすべらせて動く漏斗状の雲となって、砂は煙のごとくに、帯電した空気薄の渦の真中を上昇し、まるで老練な水夫が恐れるあのどよめく竜巻のようだ。今や一見低くなったかに見える天空は、荒漠たる草原の上に暗い麦わら色の薄光を投げかける。急に地平線が近くなる。それは曠野をせばめ、旅人の心をしめつける。熱くて埃だらけの大地、霧のようにぼんやりとした煙の輪となって漂う大地は、気温を高めて人を窒息させるのだ。……

白茶けた扇状葉ヤシの蒸発を防いでいた沼や池もしだいに姿を消してゆく。氷の北国で獣たちが寒気のために体をこわばせるとすれば、ここ熱帯ではボア大蛇もワニも微動だもせずまどろみ、乾いた赤色粘土に深くもぐったままだ。乾燥はいたるところで死を示す。しかも屈折光線のいたずらが作りなす波立つ水面の虚像が、渴に苦しむ者をあちこちへ駆り立てて止まない。……薄暗い埃の雲にとりまかれ、飢えと焼けつく渴に脅かされて、馬や牛があてどもなくさまよう。牛は低くうつろな声で吼え、馬は首を長くのばし、風に向って鼻を鳴らしながら、空気の流れの湿り気から、まだ蒸発し切つて

ない沼のありかを探し求めるのである。ラバはより慎重に抜目なく、別のやり方で渴をいやそうとする。球形をして葉脈の多い植物であるメロンサボテンはその棘だらけの皮の下に水気たっぷりの芯を秘めている。ラバは前足で棘を左右に分け、それから用心深く唇を近づけ、思い切ってサボテンの樹液を飲みこむ。……

長い乾燥期が終ってやっと恵みの雨期に入ると、曠野の状景はたちまち一変する。これまで決して曇ったことのない空の濃い青色がすこし明るくなる。夜の間、南十字星座の中には暗黒の空間が殆ど認められず、マゼラン星雲のあの隠かな燐光も消えてしまう。遙かな山脈の如くに雲の塊が一つまた一つと南の空に現われ、地平線を垂直に上昇してゆき、霧がふえて霧となり、遠雷が蘇生の慈雨の到来を告げる。^{〔注3〕}

本書はもちろん国際政治や戦争とは全く関係のない博物誌であり比較風土論であり、中南米探検の報告である。しかし観察対象の珍らしさと多彩さ、目のさめるような描写力、文章の潤達さはドイツ語名文のひとつに数えられているし、何よりも、未開の大自然に肉迫してゆく人間の知性の高邁と意志の強靱が光り輝いている精神的作品であった。ドイツ語圏内の各読書層からの反響も少なくなく、従って *deutsche Sprache* に対する国民の自信を深め、また *deutsches Gemüt* の醇化に大きく貢献したことは疑いない。

〔3〕 1807年のドイツには民族文学の父ヘルダーも、人道正義の国民詩人シラーもすでにいない。カトリック教のバイエルンはフランス側について領土をあげたうえ王国となり、この戦争でも南からプロイセンに侵攻した。仏軍によるベルリン占領はウイーンを監視する意味もあって、まだ当分続く筈であり、従って国王夫妻はなお東部国境に仮住いを強いられている。明敏なるフォン・シュタイン大臣はフランス皇帝によって危険人物として国外に追放され、1808年からプラーハに亡命の身をかこつ有様。ドイツ人というのはやっぱり国土を統一できず、昔から井の蛙である辺境貴族の集りでしかないのか。劇場も商工業も美術もろくなものがあるか。かのフリードリヒ大王だってドイツ語をいとも軽んじたではないか。15年前、圧政の鎖を破って自由をかちとり、「友愛」を普遍の理想とした市民たちが、今はドイツ民族をとことん膝下に組みしめ辱かしめんとする野心家皇帝ナポレオンの徒党として振舞うのは、新時代の戦争というものが *enfants de la Patrie*^{〔注4〕} 祖国の子たちの間の戦争、つまり民族戦争と化したことを意味するのか？ それにしても解放され政治権力を握った第三身分のエネルギーと団結心は、長い混乱とテロリズムを経たあとでもなお、かくも恐るべき力を発揮できるものか？ 封建ドイツの分立した諸国は、宮廷における抜きがたい側近（僧職を含む）の政治決定と、官僚・軍部の昔ながらの保身主義のせいでかくも無力になり、かくも総崩れの汚辱にまみれてしまった。瓦解したプロイセン、敵の同盟国にひとしい南独諸邦は論外として、いったいどの邦国、どういう Gruppe がドイツ再起の核になりうるだろうか。あの戦争の天才はまだ38

才の壮年で、一族郎党を大陸の主要国の王にすえており、なお余勢をかつてピレネーの
かなたに軍を進めて、その支配体制はまづ永久にゆるぎないものと見えた。^(注5)

II フィヒテの「ドイツ民族に告ぐ」

45才の無任所の教授ヨーハン・ゴットリーブ・フィヒテがケーニヒスベルクからベル
リンに帰ってきたのは、実にドイツにとって八方塞りの、暗然たる、出口なしの1807年の
初冬であった。彼自身の体も一年前にひどく患っており、1805年にやっとその哲学教授
に任ぜられた Erlangen 大学 (プロイセン領) は敗戦のあおりをくって閉鎖されてしまい、
フィヒテは妻子をベルリンに残して、王政府の移っているケーニヒスベルク (20年前こ
こに彼はカントを訪ねて激励された) に自らも赴き、乏しい生活の中で現代政治につい
て深刻に思索したのだった。彼は三年前の冬にも Berliner Akademie der Wissen-
schaften において現代社会の退歩と墮落を糾弾する連続講演を行って反響を呼んだのだ
が、このたびは占領軍の目の前で再びこの学士院の壇上に立った。すぐる1799年、当時
輝けるイエーナ大学教授だったフィヒテは強い宗教哲学的信念を頑固に主張しすぎたた
め、「無神論者にしてジャコバン派」としてザクセンワイマル政府により退職させられる
という不快な事件を起しているが、この時の窮境から寛容にも彼を救ってベルリンで生
活する許可を与えてくれたプロイセン宮廷に対し、^(注6) フィヒテは、たとえ政治上は共和主義
を奉じてはいても、持前の誠実で熱烈な性格からして、深厚な恩義と敬意を心の底に
もち続けたのであろう。かつてイエーナ時代に、「全存在は das absolute Ich (絶対的
自我) なる唯一の原理の展開したものである」という形而上学でもってドイツのロマン
主義運動のひとつの中心となった鉄の論理をもつ人、その文体と道徳的情熱によって当
代無比の倫理的な人格とうたわれたこの哲人の講演は、フランス軍にも黙認され、少な
からざる学者や多くの学生たち、半ば及び腰の貴族、実業家、文学者らに迎えられて行わ
れた。

論題は初回から国家指導層の利己心が批判され、その腐敗・無力を招いた原因として、
専ら Bildung zum Besitztum (財産のための教育) のみが少数の上流階級に与えられて
きた事があげられる。今までドイツ民族における人類のたえざる発展は民衆 das Volk
に発してきたし、また大きな民族的問題は常にまづ民衆のところを持ちこまれ、彼らに
処理されてから後代へ伝達された……。これからはまさに、今日の教養階層とその子
孫が民衆となり、これ迄の民衆から別のより教養ある階層が生れてこなければならぬ
……。第2、第3講ではフィヒテの最大の主張である独立心と自発性を養う新教育、
^(注7)
快樂本能や利己心を自分で抑えてより高い道徳的秩序 (神それ自身に基礎をもつ永久に
発展する法が支配する秩序) を青少年に目指させる公教育が説明される。この教育共同

体は個人が全体のために我欲を捨てるのみならず、進んで全体のために尽すべく行動しなければならぬ所であり、強い罰則をかけた、知育と体育のほか、理想をもつ農耕と手工業も行われる。優等生は自発的に級友を助け教えねばならず、それへの報酬やほめ言葉を期待してはいけない。die geistige Bildung 知育と die sittliche Bildung 徳育に加えて die religiöse Erziehung 宗教教育こそが新教育の最終の仕事である、「しかし死すべき肉体の臨終を越えてなお、我欲をあゝの世に導き入れんがための綱として Gott を必要とした如き、また、現世では弱かった我執を来世での希望と恐れによって強くせんがために Gott を必要とした如き古い宗教は直ちに葬り去られるべきだ。なぜなら新しい時代においては、永遠とは墓の向うに行つて始めて現われるものではなく、この現在の真唯中^(注8)に出現するものなのだから。」そして末尾にユダヤの終末論的予言に似せつつ、ドイツの現状を痛切に訴える。「我らのより高き精神生活の各成分をも同じように白骨へと枯死せしめよ。また我らの民族統一の絆をも同じく寸断して、乱雑の極に散逸せしめよ。——だが蘇生の力をもつ靈の世界の呼吸はまだ息ぶきを止めてはいないのだ。それは一度死んだ我々が民族の骸骨を包みこみ、それらを光あふれる新たなる生命へと再びつなぎ合わせてくれるであろう。」

かつてのフィヒテの反権勢的向う見ずの性格と熱弁による感化力はつとに有名であったので、占領軍も注目していたのだろうが、話の骨子は精神論と教育についてなので、安堵と冷静の雰囲気定着する。続く第4から第7講演までの（印刷時の）表題は以下のものである。「ドイツ民族と他のゲルマン系統の民族との主たる相異」、「提示した相異から生ずる諸結果」、「歴史上のドイツの特性の説明」、「一民族の根源性 Ursprünglichkeit 及びドイツ性 Deutschheit のより深い把握」。

フィヒテにおいて一民族の真の価値、民族の将来性は正にその精神生活の高低に在り、単に知性のみならず、知性と心情 Geist und Gemüt が一体となったものに在る、というのが大前提だ。その精神生活は民族の Muttersprache 母語の根源性、連続性、純粹さに左右されるとする。元はゲルマンの部族だった集団が A.D. 3~4 世紀に西と南に大移動してガリアやヒスパニアに住みついて新ラテン語族を形成していったが、彼らが新たに受入れた新ラテン語（現代で言うロマンス諸語）は、ラテン語自体がキリスト教による断絶やローマの滅亡によって一度は殆ど死語となったものだから自然の生命に欠けている。一見、優美で才気あふれる知的言語と見えるが、それは民衆の精神生活の必要と殆ど結びつかず、従って生きた全国民の母語とはいえない^(注9)。ドイツ人が強大なる外国に対する崇拜心からしてその外国語の幾つかの語を得意になって口にするのは、慢心した教養階層とまじめに働く民衆との間の隔壁を高めることでしかない。だいたい前者は既得の権勢と外国かぶれしか頭にないものだ。民衆出のルターが始めた Reformation — 腐敗した教会の改革を志した先覚者はあちこちに出たが、すべて潰されてしまったの

に——たまたま彼の主君一家が民衆の切なる魂の淨福の希求に同感し、またドイツ民衆にのみ残されていた忠誠・素朴・清廉潔白という徳行が、ルターの「聖書による神との直結」の信念を支えたからあのように成功して、外国の知識階層にまで大影響を及ぼしたのである。^(注11) 本来のドイツ哲学を創始したライプニツは、外国語で著述しながらも、プロテスタント主義に基く自由なる思索を堅持して、理性それ自体のなかに超自然・超感覚・神の善意を探し求めた。「我々の見るところでは、外国は理性と哲学のもう一つ別の任務、つまり完全なる国家の建設という任務をば、気やすくしかも熱狂的にとり上げ、思い切って遂行したが、間もなく失敗し、今ではその思想を犯罪だときめつけている。

(大革命のなかで急進的啓蒙主義が忽ち挫折して、それが反って恐怖政治に転化したことの指摘だろう。)まづ最初に完全なる人間を育成するという課題を真の実行によって解決しうる国民のみが、次いで完全なる国家という課題をも解決するであろう。^(注11) フィヒテは用心深く、終始 Franzosen とか französisch の語を避けているが、しきりに出てくる das Ausland (外国) は大ていの場合フランスを指している事は明白である。また中世のイタリア都市とドイツ都市を比べながら彼は後者の永い平和と相互協調をあげて、「近代ヨーロッパ諸国民のうちで、共和制度を維持し続けうることを長年の実践でもって示した唯一の市民階級はドイツ人であった」と断言し、その訳は彼らの謙虚・廉直と公共心にあるとしている。^(注11)

第九講演から哲人はいよいよ新しい民族教育の具体的方法をのべる。それが依拠するのはやはりドイツ語圏の市民出身で、博愛と勤労と人間交際を調和よくはぐくむ家庭的教育をばスイスの小作人学校や貧民学校で実践してみせたペスタロッチー(1746~1827)である。しかしフィヒテの要求する公教育はもっと厳しいものだ。「民族教育という高き概念からして、我々の確信は、特に勤労する階層にあっては親許から通つての新教育は不可能であり、子供は両親から全く隔離しないことには断じて始めることも続けることもできないということだ。毎日の出費に対する親の不安や、こせこせした利欲心は必ずや子供に伝染して魂を卑しくし、思想の世界へ自由に飛翔することを妨げるだろうから。」^(注12) 子供らは既に墮落している一般の大人から切離して、少くとも自己鍛練によって、子供の前でどう振舞うべきかを自覚し自制できる成人、子供が自分をよく見ていると反省できる成人と一しょにしなければいけない。この人々が子供たちの教師であり目上である。この教育施設は自給自足を旨とするが、授業として成人も子供もすべてが自分の力に応じて農耕し牧畜し大工をやるのが重要である。けだし子供は自分が将来は有能な勤労者になるのだという意識を今から持つべきであり、他人の慈善にたよらず世間を生き抜く自立心の養成こそが最大の徳育目標だからだ。^(注13) (フィヒテはザクセンの片田舎でリボン紐職人の子として生れたことを生涯誇りとしていたし、共和主義の信奉とルソー崇拜は終生変ることがなかった)

さて、しかし現実問題として、この新しい理念による団体生活の教育に誰が資金を出し、発起人となって始めてくれるかの難問が当然おこる。ルターがかつて諸領邦の君主に訴えたように、フィヒテもまずドイツの各国政府に向って、昔からのドイツの教育熱心を例にあげて訴える。常備軍を維持するのに要する金と努力の何分の一かがあれば十分足りるのだし、どれか一国が乗り出せば必ずやそれに続くものが幾つか出るにちがない、なぜなら祖国愛と勤勉と道徳心を教育する施設はその国の繁栄と防衛の原動力となり誇りともなる筈だからだ。もし不幸にして諸国政府があてにできないとならば、個人の大地主や有力市民の連合に、彼らの見識と好意に訴えるしかないが、歴史的に考えてもその見込みはある。更にもし、政府にやる気がなければ有産階級は子供をその種の私立の学校に委せようとはしないだろうという心配はもっともだが、「その時はしかたがない、自信をもって我々は、貧しい孤児、巷でみじめにうろついている子、世の大人たちが締め出し投げすてた子供たちに話しかけようではないか……………彼らがパンと一しよに精神教育をも受取るように、今まで誰もがパンを与えなかった彼らにパンを与えようではないか。彼らの以前の粗暴や貧窮が我々の目的の邪魔になるなどと心配せず、^(注14)彼らをとにかく早急に我々の全く新しい教育世界の中に引っぱり込もうではないか!」かくも単刀直入に表現する Johann Gottlieb Fichte という個性は政略的煽動家などでは毛頭なくて、現下のドイツ民族全体が落ちこんでいる最低の隷属状態を精神的原因から分析して、民族再生とともに道義的人間の回復へのかすかな手がかりでも求めようという真剣そのものの教育者なのだ。だからこそ最終の第14講演における彼のドイツ人各層への呼びかけはいささか悲愴であり、諦念的とさえ聞える。「私の述べてきた事が真実であるとせば、貴方がたこそ近代国民すべての中で、人間的完成の萌芽を明確に宿している国民、その発展への最初の一歩を踏出す使命をもつ国民なのである。この本質をもつ貴方がたが没落するとなれば、同時に全人類をその悪の奈落から救うという希望もすべて地に落ちるのだ。既に経験したケースを単に繰返せば何とかなろうという安易な考え、古い文化が破産した後にその廢墟の上に、半ば野蛮人である民族の中から新しい文化がもう一度生れてくるだろうという根拠なき意見で自らを慰めたり期待してはいけない。……………逃げ道はないのだ。貴方がたが滅亡すれば、将来恢復する希望もなく全人類もともに滅亡するのである。^(注15)」

1808年3月に終ったこの講演はその弁論のパスと徹底した民族主義的公教育の提唱とによって果して聴衆に深甚な感銘を与え、直ちに印刷にふされて全国の各階層、とくに学生や教師たちの魂をゆり動かしたと言われる。全国民に初等教育を施す法令を第一とするフンボルトの教育改革が始められ、シャルンホルストたちが保守派の不興を排して軍制刷新に成功しえたのも、こうした精神的背景があったからだろう。原稿は毎回事前にフランス軍当局により検閲を受けねばならなかったもので、フィヒテも慎重に言葉を

えらんではいる。例えば：「我々は敗れた、武器をもつての闘いは終わった。これからは我々が望むところの原理原則の闘い、倫理と品性の闘いが始まるのである。我々は外国の客人（占領軍のこと）に対し、祖国と友人への忠誠心、ゆるぎない実直さと義務感など市民家庭の美德のドイツ的イメージをば、彼らがいずれは帰ってゆくだろう故郷へのよき土産物として献上しようではないか。」^{（注16）}

この頃12才だったカール・L・インマーマンはその回想録（1840～1843）の中で、フィヒテが半分だけ思想家として、あとの半分は、そしておそろく半分以上は、何事にも反論をとなえる性格 *opponierender Charakter* として活動したのだといささか皮肉って言っているが、同時に彼の革命的ともいえる決然たる姿勢の背景には、この上なく哲学的に考えぬかれたクリスト教的良心があるとも述べている。^{（注17）} 民主革命の大義をふみにじり、革命の成果を己れの野心に利用したと彼が考えるナポレオン、その武力によって強いられた隷属と不幸をはねのけるために、彼の愛国心は君主たちに向って、「ローマ軍の侵略をはねのけて、神の世界計画を熱狂的に守った高貴なゲルマンの祖先を思い出せ」といったような即効的アジテーションも結構やっているが、フィヒテはすぐ続いて、信仰思想の自由を繰返し訴え、永遠の生命に人々の注意を喚起せずにはいられない屈折した心理を露呈している。^{（注18）} 哲人の抜本的な *Nationalerziehung* の主張に対して、我関せずの政治拒否派、あるいは、いぜんとして英雄崇拜・フランス崇拜にとどまる懐疑派も少なくなかったことはやむをえないだろう（科学者ゲーテ、ニュルンベルク高校長ヘーゲル、作家シャミソーなど）。しかしフィヒテの反詩人的性向とは無関係に、この時期にロマン主義文学運動の第二波が各地に高揚して多くのすばらしい民話・民謡・民族史・敘情詩があいついで刊行され歓迎されており、彼の行動も期せずしてその一大ドイツ精神運動の重要な一翼を担ったわけである。

Ⅲ Befreiung（解放）

不倶戴天の敵たる大ブリテンを屈伏させる唯一の道である大陸封鎖令を各国に更に徹底さすべく、独裁者がイベリヤ半島に軍を進めたのはちょうどフィヒテの講演が始まる頃だったが、これがスペイン民衆を全面的なゲリラ蜂起に導き、英軍の強力な援助もあって、スペイン戦争はナポレオンに泥沼的消耗戦を強いることになる。いっぽうパリ駐在大使メッターニヒの密偵による詳しい報告はウィーン内閣を動かし、敗戦後4年かけての国軍再建にも成功したと信じたオーストリアは、「ドイツ民族の総けっ起」をスローガンにかかげて1809年春に挙兵した。駆けつけたナポレオン軍と良く互角の勝負をしていたが、仏の同盟国たるバイエルン軍の来援によって又もや破られ、ウィーンは再度占領され、多くの領土と住民を取られ、保持兵力は15万以下とされ、大陸封鎖令も吞まされ

〈注19〉

た。とうとうメッターニヒ侯が外務大臣となり、二流国に落ちた祖国を背向い、北では三流国のプロイセンと一流帝国ロシアの動向をにらみ、西では宿敵バイエルンとローマ教皇に探りを入れ、南では地中海を通じて英国に、またロシアと争っているトルコに、さらに遠く問題のスペインにも目をくばることとなる。

1810～1811年はイベリヤを除いてふしぎに戦鬪のなかつた平和な2年間だった。子の出来ない皇后を離婚したうえで、ロシア皇帝の妹と結婚して東辺をより固めようと意図した独裁者は、アレクサンドル一世に巧みにかわされたあげく、メッターニヒの仲介でオーストリア皇帝の娘と結婚した。その翌年男子が生まれたときのナポレオンの喜びはとうぜん非常なものだったが、おそらくメッターニヒの満足感のほうがより深かったであろう。彼は自分の運の強さに自信をもちながらもあくまで慎重に隠密を旨とし、今のところ独裁者を弱めうる唯一の大陸君主はたぶん、広漠たる大地と盲信の農民を率いる智者アレクサンドルであろうと目をつけるや、彼は秘術をつくしてしかし気長に、大陸封鎖のほころびが既にあちこちで露呈していること、オーストリアとスペインの戦鬪ではフランス軍も相当の損害をうけており、ナポレオン不敗の神話はもはや通用していないこと、もしロシアが立上るならばウイーンは機を見て必らず出兵するし、その時は再建途上のプロイセン軍も間違いなく旗上げするはずであること、などを挙げてアレクサンドルとその将軍たちを口説き続けた。彼の有力な情報源のひとつは旧知のフランス前外務大臣タレーランで、彼は独裁者の止めどもない侵攻政策に反対して地位を失ったうえ、1809年にジョゼフ・フーシェとの共同謀議を疑われて皇帝からにらまれていたが、持論の「欧州諸国の勢力均衡主義」を心中いぜん堅持していたのだ。

フランスとロシアの間でいくつかの敵対的行動がほぼ一年間交わされたあげく、ナポレオンはやっぱり戦争の天才の自尊心に駆られて、アレクサンドルをこらしめるべく、プロイセンとオーストリアをも同盟に引入れて60万の大軍を結集し、外交・謀略・補給の面でも可能なかぎりの策を途中でも講じながら、1812年6月に遂にロシア領内に侵入してしまった。全欧州はこれを迎えうつ明らかに劣勢のロシア軍の動向をかたづをのんで見守った。今やアレクサンドルの政治顧問となっているフォン・シュタインも、プロイセンから亡命してロシア・ドイツ部隊の参謀を務めているクラウゼヴィッツも、1810年創立のベルリン大学で教授をしているフィヒテも、そして「イタリア絵画史」の草稿を携へて遅ればせながらスモレンスクめざして急行するスタンダール主計官も。

8月のスモレンスク退却からロシアは練達の老将Michail Kutsusowを総司令官となし、9月のボロディノ血戦で不利となるや老将は、首都にいる宮廷の怒りをかわしつつ、モスクワの背後に軍を徹退させて持久戦に入った。疲れて空腹をかこつ大陸軍をモスクワに迎えたのは、なんと人気のない空屋ばかりか、その翌日からの大火災の連続だった。みごと裏をかかれたナポレオンは幾度もロシア皇帝に対し媾和を呼びかけたが、ペテル

ブルグからは梨のつぶてである。フォン・シュタインの献策をアレクサンドルが勇断をもって聞き入れたからである。もちろんクツゾフにも11月が到来すれば、コザーク騎兵隊と遊撃兵团とによって、寄せ集め軍勢で飢えに悩む敵をなんとか撃破できるだろうという目算はあった。ロシアの内懐は十二分に深く、ここの冬は西の外国人の想像を絶する寒さと豪雪が支配するのだから。皇帝と総司令官とは時々そりが合わないこともあったのだが、そして二人ともそれを意識してはいたが、最重要なつぎの点においては全く同じ確信であった。即ちロシア国民の復讐心＝戦意はいまが絶頂にあること、ナポレオン軍の志気と冬への戦備が最低のところにあること。たとえナポレオン個人の才略はまだ活着しているとしても、軍隊が30日ものあいだモスクワで略奪徒の集団と化したのだから、それを叩いて国外へ追い出すのは今を置いて他にない、という考えは一民兵・一農民に至るまで滲透し、彼らを陽気に捨身にし、同時にまた敵に対しては残忍この上ない兵卒となしたのである。またトルストイの描写によれば「全フランス軍の状態は、ちょうど自己の死を感じつつもなすところを知らぬ手負いの野獣の状態さながらだった。この軍隊のモスクワ入城から殲滅にいたるまでの間のナポレオンの巧妙な行動や目的を研究することは、致命傷をうけた野獣の末期のあがきや痙攣の意味を研究するのと同じである。」^{〔注20〕}

10月19日に10万の仏軍が徹収し始めてから、ベレジナ河での大損害（11月末）、各同盟軍の悲惨な敗走、プロイセン軍の突然のロシア側への合流（12月30日）、パリでの陰謀を知ったナポレオンの急ぎの帰国と早急な再武装の成功（1813年2月）、西欧への進攻に一貫して不賛成だったクツゾフ総司令官の病死と、皇帝の総司令官就任（4月末）、という半年の経過は周知の歴史的ドラマである。だが不死身の天才をなお相手にせねばならない各国はそれぞれの目論見を胸に秘めながら、大ブリテンに戦費と物資の大援助をもとめつつ、合同で戦略をねり、自軍を動員していった。プロイセンはこの年に国民皆兵制を布告して大動員に成功し、改革の責任者シャルンホルストは国軍参謀長に就任して、考えぬいた「整然として迅速なる退却戦術」を幕僚と更に煮つめていた。スエーデンも彼の側に加わった。一方ナポレオンはザクセンを味方にし、バイエルンは中立を保つ。

1813年の春の陣は東ドイツで始まったが、なんとオーストリアは不戦をきめこんだ。メッターニヒの言分はたぶんこんなものだろう：「フランス皇后はわが皇帝の王女である。波に乗っているロシアと再建されたプロイセンの勢力をナポレオンによって少し殺がねば、我国の将来がむしろ心もとない。」果せるかな、50万の仏軍は三つの戦場で勝利をおさめ、連合国はうまく退いたが旗色が悪く、二ヶ月の休戦が成立した。この間二つの注目すべき交渉が行われる。負傷したシャルンホルストは是が非でもウイーンを味方にすべく、プラハでオーストリア軍と折衝している最中に敗血症で狐独のうちに絶命してしまっ^{〔注21〕}た。いっぽうメッターニヒはひそかにドレスデンでナポレオンと会い、彼の皇

帝の位と領土の保全を約束しつつ、五大強国均衡策を彼にふきこもうと試みるが、フランス皇帝は外相の策謀癖に不快感をかくさず、彼の言を拒絶するのである。かくてメッターニヒは止むなく連合側に組することに決し、ここに8月中旬から秋の陣の幕が切つて落された。プロイセン主任参謀のグナイゼナウが総参謀長となった連合軍は、緊密な連携のもとに、始めから主戦場と想定していたライプツィヒへ敵軍を引きこんで、二倍の兵力で決戦をしかけ、10月19日遂にナポレオン軍を潰滅せしめ、一気にライン河の西へ敗走せしめた。世に言う Völkerschlacht 諸国民の会戦である。

さてこの大会戦の敗北でわずか10万に減った仏主力軍も、祖国に入るとさすがに簡単には引下らなかつた。ラ・マルセイエーズの歌声：

武器をとれ、市民よ、隊伍を組め！
進めよ進め、汚れたる敵の血もて
我らの田畑をうるほし満たせ！

は一そう強く響き渡つた。だが幾つかのフランスの勝利も外交のかけ引きも、連合軍のパリ入城と侵略者皇帝の排除をとどめることはできなかつた（1814年3・4月）。ドイツ諸国からこの待ちに待たれた《解放戦争》に義勇兵として加わる者が続々と集つたが、著名な詩人や教師にまじつて、ベルリン大学鉱物学教室の助手で結晶の研究者である Friedrich Fröbel（後の教育者、1782～1852）もいた。彼らにドイツ民族教育の精神を吹きこんだフィヒテはどうしたか？彼は従軍牧師を志願したが、52才の年齢と体の弱さもあって許可されず、そのうちにフランス敗残兵から発生したといわれる発疹チフスがベルリンでも猛威をふるいはじめ、幾千人の犠牲者のなかに哲人をもまき込んでしまったのである（1814年1月24日）。彼はナポレオンの最後の敗退をその目で見ることはできなかつた。だがまた、1815年に始まる王政復古の超保守主義や、新発明と自由主義に基づくすさまじい商業主義に対して、再び怒りをぶつけざるをえない運命だけはまぬかれたと言えるかもしれない。その超保守主義^{〔注22〕}に抗して学生たちが政治的に尖鋭化してゆく中で、独自の人間形成の理念をかゝげて教育事業に向つたのがフレーベルである。

注

- 〔注1〕 J. G. Fichte im Gespräch, Berichte der Zeitgenossen. Band 1, frommann-holzboog, Stuttgart-Bad, 1978. S. 225.
〔注2〕 世界の名著「ヘーゲル」, 中央公論社. 25頁。
〔注3〕 A. v. Humboldt: Kosmische Naturbetrachtung, Kröner Taschenausg. 266. 1958, S. 168-170.
〔注4〕 フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」の最初の二行は：

立て祖国の子らよ、

栄光の日は来たれり。

- 〈注5〉 桑原武夫編「フランス革命の研究」, 岩波書店。1959年初版。「第一章 ナショナリズムの展開」を参照せよ。
- 〈注6〉 K. レーヴィット「神と人間と世界」柴田治三郎訳, 岩波書店, 1973年, 94頁。
- 〈注7〉 Fichtes Werke, Walter de Gruyter & Co. Berlin 1971, S. 278-279.
- 〈注8〉 Fichtes Werke, a. a. O., S. 298.
- 〈注9〉 渡部昇一: 日本語について, 文春文庫「文科の時代」所載を参照せよ。
- 〈注10〉 a. a. O., 337頁(第5講演)では, 生きた言語の民族と死語の民族の間の根本差として, (i)知的教養が生活に浸透しているか否か。(ii)教養ある階層と民衆の間に隔壁があるかないか。(iii)前者には万事について勤勉と真剣さがあり, 労苦をいわないのに対して, 後者は知的仕事をむしろ才気ゆたかな遊びとみなし, 自分の恵まれた天性の導くままに気楽にやる, などが挙げられている。
- 〈注11〉 a. a. O., S. 357.
- 〈注12〉 a. a. O., S. 407.
- 〈注13〉 a. a. O., S. 422-424.
- 〈注14〉 a. a. O., S. 442.
- 〈注15〉 a. a. O., S. 499.
- 〈注16〉 a. a. O., S. 470.
- 〈注17〉 K. レーヴィットの上掲書, 93頁。
- 〈注18〉 ゴーロ・マン「近代ドイツ史 I」上野一夫訳。1973年, みすず書房, 48~49頁。
- 〈注19〉 この度の敗戦はオーストリアにとって国民的災厄となった。老齢のハイドンは病床にあったが, フランス軍のウイーン占領後数日にして息をひきとっている。
- 〈注20〉 トルストーイ「戦争と平和」中村融訳, 筑摩書房世界文学大系39, 302頁。
- 〈注21〉 庶民の生れで砲術将校出身である Scharnhorst (1755~1813) は, 戦歴ゆたかな軍事理論家であると同時に, 第一線指揮官としても勇敢で責任感旺盛な名将である。学歴は低い, 英・仏語がよくできるし, 政治的にも柔軟な頭をもつ彼は, プロイセンの参謀部を独立させ, 短期入隊制度による強力な予備兵団を作って温存し, 1813年の春の陣ではロシア軍司令官を連合総司令官に推して戦うなど, ナポレオンを向うに回して, 大組織者として才幹をいかに発揮した。渡部昇一「ドイツ参謀本部」中公新書381, 1974年初版を参照せよ。
- 〈注22〉 フィヒテは自分で die Tat-handlung 《事行》の語を作るほど実践を重んじた哲学者だが, とりわけ精神的講話でもって世人に働きかけたいとの生衝動が強かったという。Die Grossen Deutschen, Prisma Verlag, 1978. V. S. 187.